

恒川武敏先生を偲ぶ

「恒川先生を偲んで」

武 田 脩 彦

(浄土宗宗務総長)

恒川先生の突然の訃報には全く驚きました。

平素 至極ご健康のようにお見受けしていましたし、お話し振りを聞いていまして、まことに積極性が顕われていて、且つ着実な性格も窺われて、淳々とした口調の中に燃える情熱をこめておられましたから、まだ〳〵お元気でこれからも沢山なお仕事をして下さるものだと期待していました。

先生は大正大学では私より少し先輩に当られるが、お互いによく識るようになったのは、戦後、先生が浄土宗教化部長として頭角を顕わされるようになってからのことであります。

企画性に富まれ、しかも考え放しやり放しではなく、着々と効果を挙げ、整然と成果を納めてゆく仕事振りでであると、人も評し、私もそのように拝察しました。

やがて宗門外の仕事に就く機会を得られて、京都市の民生行政に携わられ、社会福祉事務所長等を歴任され各所で業績を挙げられた後、やはり宗門人である先生は縁の深い佛教大学に教授として迎えられ、漸く発展途上にあった同大学のため種々尽力をされ、特に社会福祉学科の充実に努力されました。

傍ら宗門関係の研修会等にもしばしば講師として出講されました。

先生は学者としての見識と児童養護施設や老人福祉施設の運営に当られた実務家としての体験と、さらには宗政面での経験をもたれるという稀な存在でありました。

私が宗務総長に就任しますと、表敬訪問をして下さり、

「挨拶だけを」ということでしたのに、お逢いしてみると、互に時間を忘れてつい長時間話合うことになってしまいました。それは共に、私が宗門にとって社会福祉事業に対する根本意識の確立と将来への展望を画くことの重大さを痛感していたからに他ならなかったからです。

私の斯業に対する意欲に应えて、種々有益な示唆と激励を与えて下さったので、誠に心強く感銘し、今後の具体的ご協力をお願いして一応会談は終わりました。

其後、先生からお招きを受け、竹田社会局長共々、一夕、大いに歓談する機会を得ました。この時の成果として、まづ本宗の社会福祉事業を一層振起するため、全宗門寺院に対して平明簡易な指導解説書を配布し、これを一読して事業の概容を理解し、着手又は参加の熱意を燃やされることを祈念して、手引書の刊行をすることになったのであります。

宗務庁社会局と佛教大学社会事業研究所とが協議を重ね、編輯内容、執筆分担、出版様式等も決まり、やがて関係者の努力によって本年五月、社会福祉事業のすすめなる冊子が刊行され宗内全寺院に配布されましたが、これには恒川先生の全般的な指導と率先ご執筆のご尽力が大きかったのでは

り、しかも、この執筆が奇しくも先生の絶筆となりましたことは、まことに痛恨の極みであります。

刊成るやまづ先生のご霊前にお供えして感謝の念を捧げました。

同時に、今後尚々永くご指導を仰ぐべく希っておりましたのに、かくも早く遷化されましたことについて切々たる痛惜の念を禁じ得ませんでした。

宗門の社会福祉事業が先生の信念に应えて前進することが先生に対する何よりのご回向であると思います。

先生の霊が斯業の発展を護念し給うよう冀う次第であります。

合掌。